富士宮市の縄文土器編年

はじめに

市内からは縄文時代草創期から晩期まで数多くの縄文土器が出土している。これまでの調査成果の蓄積は、富士宮市の縄文時代の様子を知るための大きな手掛かりとなっている。ここでは市内から出土した縄文土器を編年としてまとめて紹介する。

なお、本文中の（　　）で示す数字は図3～6の出土遺物番号を示す。

草創期

市内から出土した最古の土器は隆線文土器である（1～5）。隆線文土器は、粘土紐を口縁付近に貼り付けて装飾した土器である。滝戸遺跡から出土した個体が市内最古のものになる（1）。大鹿窪遺跡からは隆線文土器の大型破片が出土しており（2～3）、平底の底部が出土している。また、大鹿窪遺跡ではこれらの隆線文土器に伴って、類似した胎土と器厚をもつ爪形文土器が出土しており、厚手爪形文土器と称している（11・12）。

滝戸遺跡や大鹿窪遺跡で出土している隆線文土器よりもやや新しい個体が、小塚A遺跡から出土している（4・5）。貼り付け隆線がより細くなり、やや薄手のつくりで、胎土には雲母を多く含む。

隆線文土器に続く微隆起線文土器は、滝戸遺跡や大鹿窪遺跡から出土している（8～10）。微隆起線文土器は、県内でほかに確認されている遺跡はないため非常に希少である。いずれも全体を磨き調整しており、緻密な隆線を貼り付けて幾何学状の文様を描いている。

続く多縄文系土器には、押圧縄文土器と表裏縄文土器がある。押圧縄文土器は、細い棒状の軸に縄文を巻き付けた工具（絡条体）を、

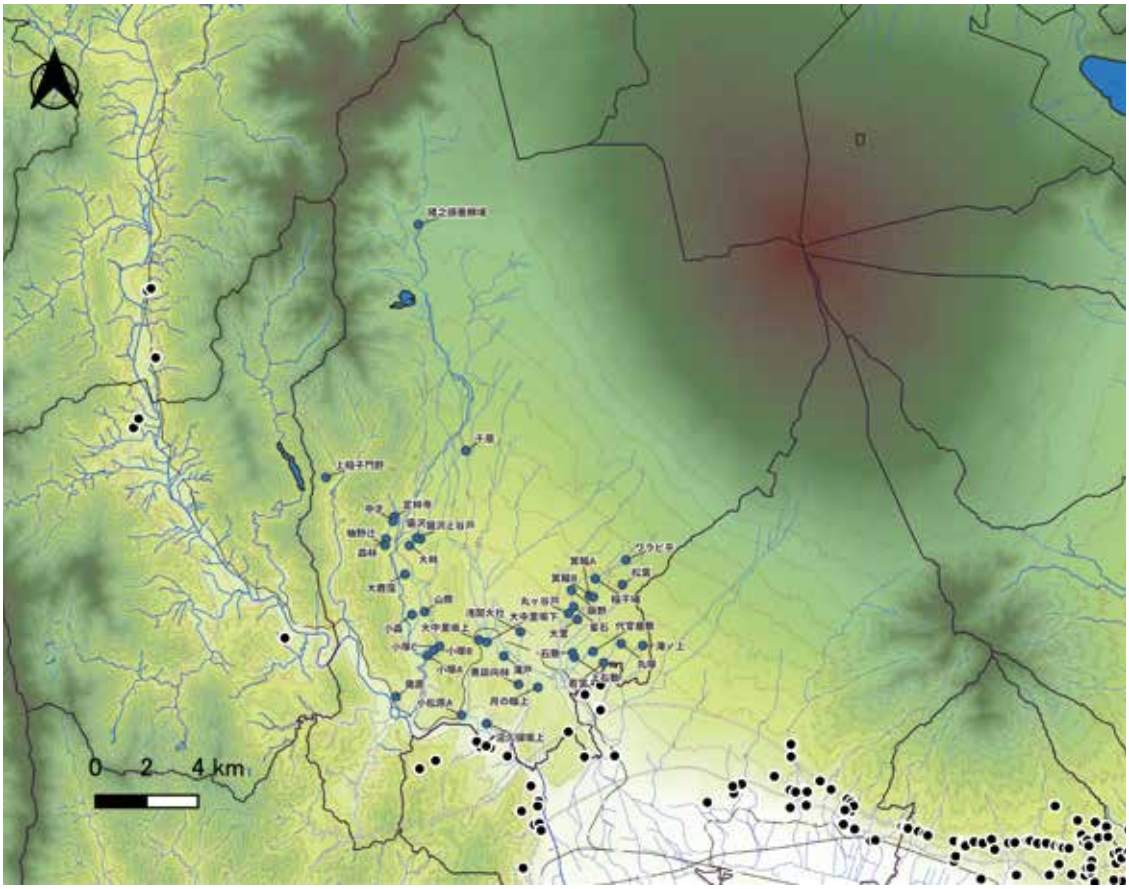


図1　縄文時代の遺跡分布図

土器表面に押し当てて文様を施した土器である（15～18）。押圧縄文土器が確認されているのは、市内で大鹿窪遺跡のみである。

また、厚手爪形文土器よりも薄手で、雲母を大量に含む胎土をもつ爪形文土器を薄手爪形文土器と称している（13・14）。押圧縄文土器と同じ地層から出土しており、文様構成も押圧縄文土器に用いられる幾何学的な構成が共通することから、同時期に作成されたと考えられる。

押圧縄文土器は、葛原沢第Ⅳ遺跡（沼津市）や仲道A遺跡（伊豆の国市）、富沢内野山1西遺跡（裾野市）でも見つかっている。大鹿窪遺跡から出土した押圧縄文土器には、葛原沢第Ⅳ遺跡や富沢内野山1西遺跡で出土した押圧縄文土器と類似する文様構成や胎土をもつものがみられるため、これらの地域との交流も推測される。

表裏縄文土器は、土器の内外面に縄文を施文した土器である（19～23）。表裏縄文土器は、大鹿窪遺跡・小松原A遺跡・若宮遺跡・小塚B遺跡から出土している。小松原A遺跡で出土する表裏縄文土器は、押圧縄文土器に近い器形（土器の形）・胎土となっているが、若宮遺跡と小塚B遺跡から出土した個体は、早期の撚糸文土器や押型文土器の器形に近いものとなっており、やや新しい時期のものと考えられる。

早期

撚糸文土器は縄文や絡条体を転がすことで文様を施した土器である（24～28）。縄文施文のものが比較的古手のものとなっている。

押型文土器は、模様が彫られた枝状の軸をスタンプのように転が

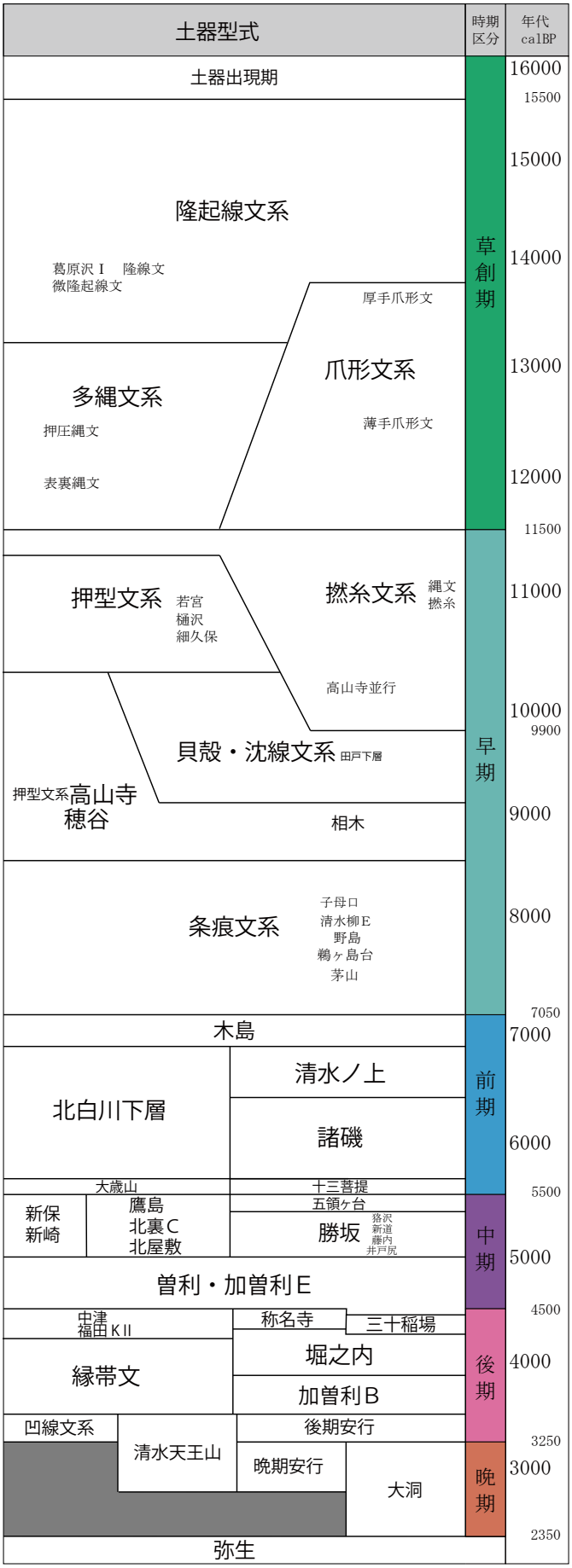
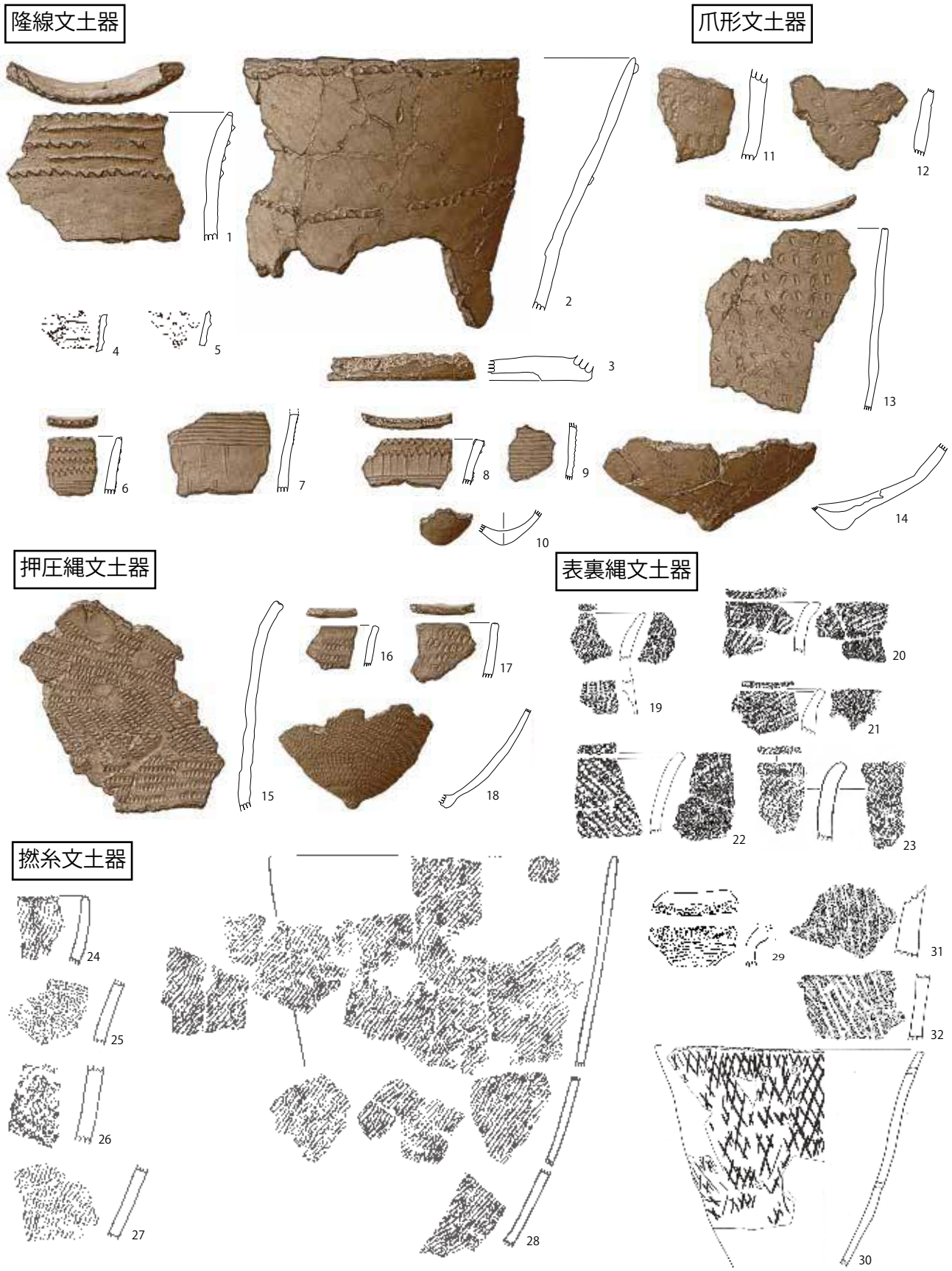


図2　富士宮市の縄文土器編年

calBP は、炭素 14 年代を較正した年代で、1950 年（Physical year）から何年前かで表現する。



1 ,8~9,29 滝戸　2~3,6~7,11~18 大鹿窪　4~5 小塚 A　19~22 小松原 A　23~28 若宮　30~32 黒田向林　（縮尺 1/4）

図 3　草創期～早期の出土遺物

して文様を施す土器である（33～43）。押型文土器は、長い時間幅で出土しており、最も古手と考えられるものが若宮遺跡と代官屋敷遺跡出土のものである。これに続くものとして石敷遺跡や箕輪Ｂ遺跡、続いて辰野遺跡や小塚Ａ遺跡が考えられる。関西からの影響も見られ、口縁部が強く外反するものも一部でみられる。

押型文土器に含まれる高山寺式土器は、黒田向林遺跡から大量に出土している（38～41）。高山寺式土器は、内面に凹線（太い棒を引きずって施文した線）を施すことに特徴がある。同遺跡から出土する撚糸文土器も、内面の調整が共通することから並行するものと考えられる。ほかにも、代官屋敷遺跡・石敷遺跡・小塚Ａ遺跡から出土している個体は、高山寺式土器に並行すると考えられる。山形押型文の施文と隆線の貼り付けに特徴がある相木式土器も、石敷遺跡で確認されている（42～43）。

貝殻沈線文系土器は、貝殻による条痕文（貝殻の表面を土器の表面に擦ってつけた文様）や棒状工具による沈線文（棒によって引いた線状の文様）を施す土器である（44～49）。田戸下層式土器が黒田向林遺跡で多く出土しており、大鹿窪遺跡・小塚Ａ遺跡・石敷遺跡からも出土している。

条痕文系土器は内面や外面に貝殻を用いて条痕を施文する土器である（50～54）。条痕文系土器については、子母口式土器と思われる細片が石敷遺跡や黒田向林遺跡から出土している。野島式土器が上石敷遺跡や代官屋敷遺跡、小塚Ａ遺跡から出土している（50～51）。条痕文系土器のなかで最も多く出ているのが鵜ヶ島台式土器で、大鹿窪遺跡や代官屋敷遺跡、小塚Ａ遺跡から出土している（52～54）。

前期

前期初頭は急激に土器の出土事例が減少する。前期～中期初頭の土器の特徴は、半截竹管状工具（竹のような中が空洞の管を半分に割って作った工具）を用いて施文することである。

木島式土器は、小破片が大鹿窪遺跡・滝戸遺跡・小塚Ａ遺跡・大中里坂下遺跡で出土するのみである（55～58）。また、清水ノ上Ⅱ式のほぼ完形の土器が箕輪Ｂ遺跡から出土している（64）。

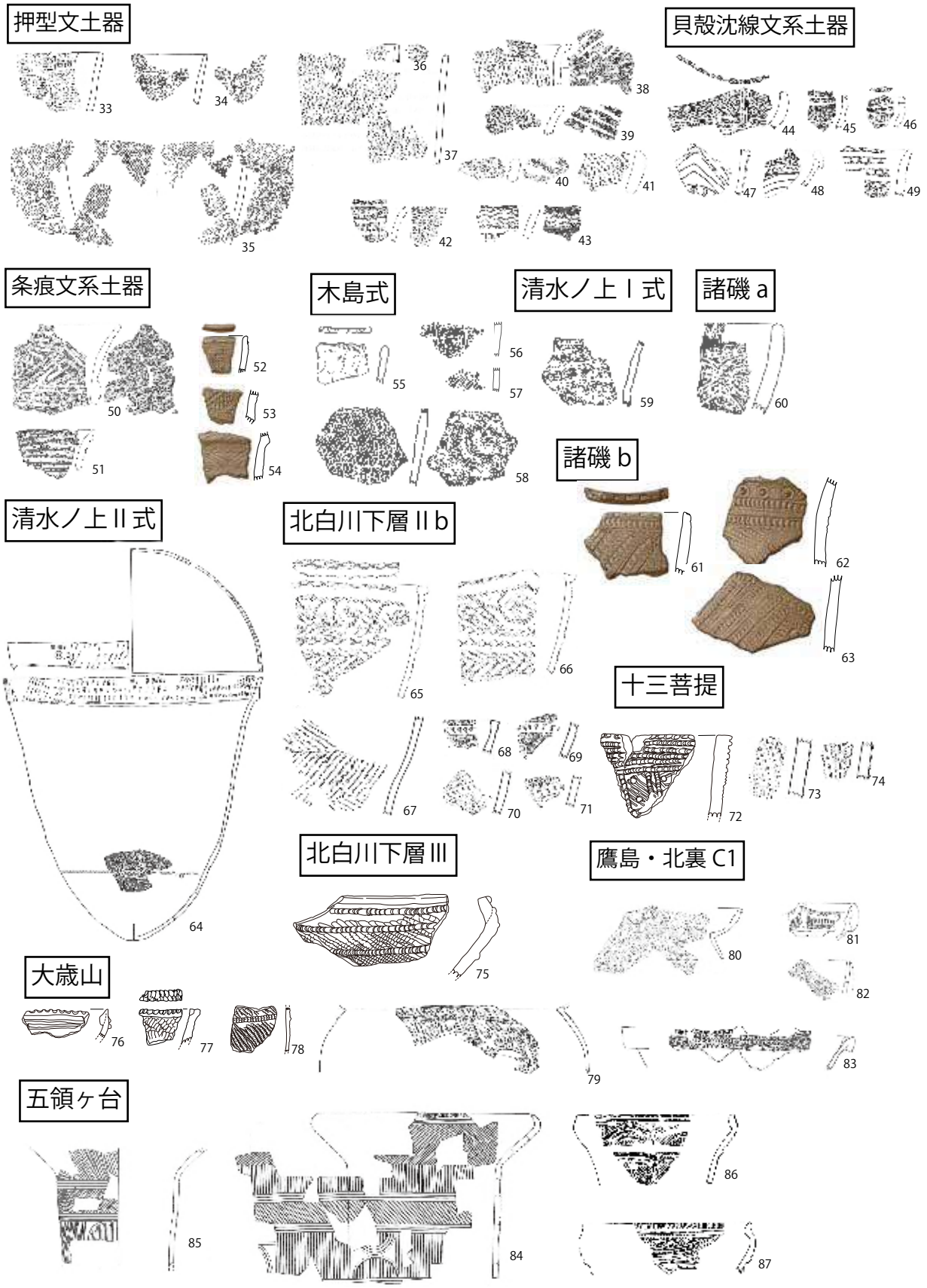
諸磯式土器の時期になると次第に出土事例が増え、小塚Ａ遺跡・代官屋敷遺跡・大中里坂下遺跡などから諸磯ｂ式を主体とする形で出土している（61～63）。

また、他地域の土器も少量出土しており、十三菩提式土器（72～74）や北白川下層Ⅱｂ式土器（65～71）が代官屋敷遺跡や小塚Ａ遺跡から出土している。

また、器面に貼り付けた粘土紐上に竹管状工具で文様を施すことに特徴がある、関西系の特殊凸帯文土器の出土も確認されている（75～79）。大歳山式土器が、ワラビ平遺跡や代官屋敷遺跡から出土しており、少量のみ代官屋敷遺跡から北白川下層Ⅲ式が出土している。北白川下層式の土器は、Ⅱｂまでは搬入品の胎土と考えられ、Ⅲになると在地の胎土のものが出土することから、土器の製作技法がこの地に定着していった様子がうかがえる。

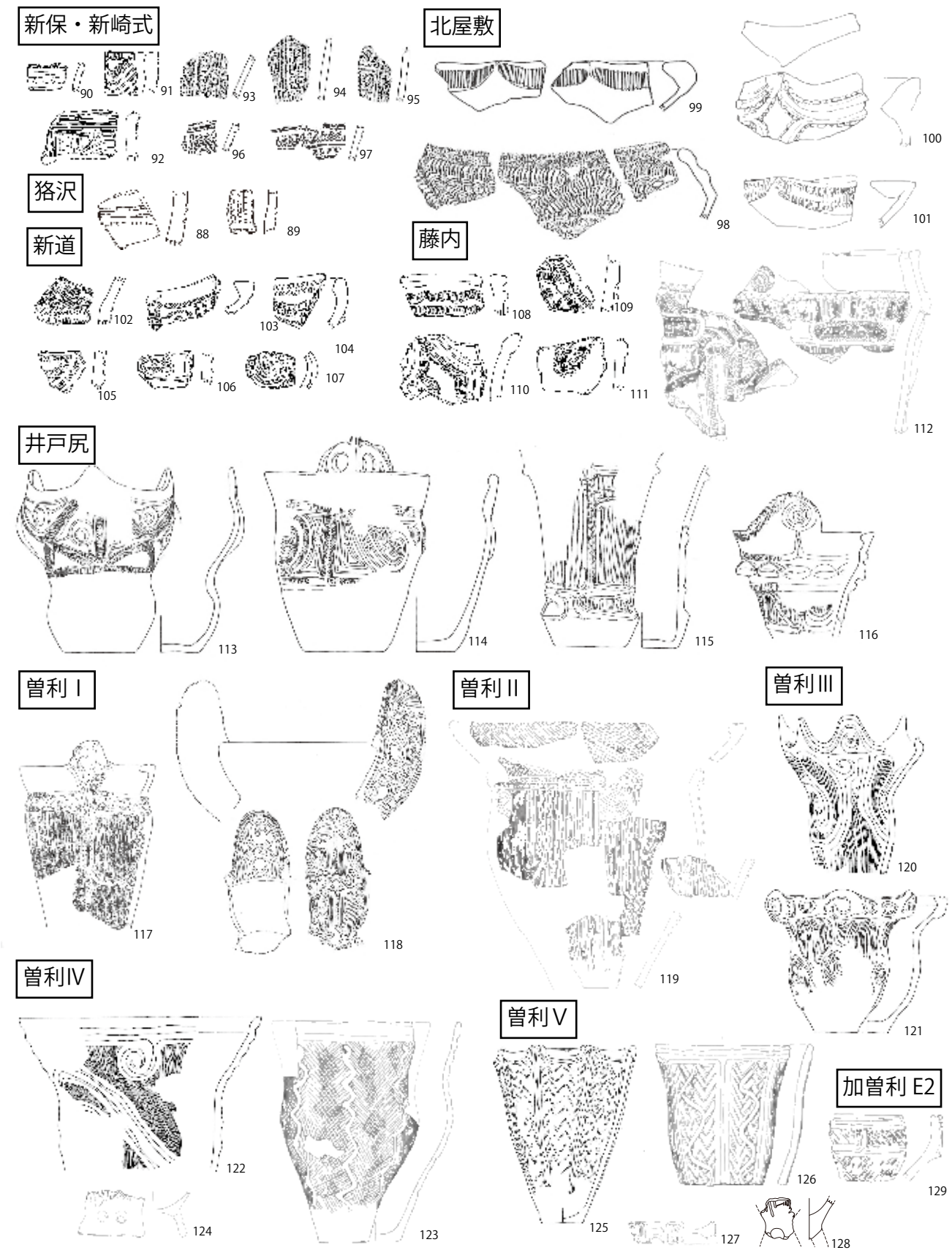
中期

中期初頭は前期に引き続き、半截竹管状工具を用いて文様を施す五領ヶ台式土器が出土する（84～87）。五領ヶ台式土器の大型破片が代官屋敷遺跡や上石敷遺跡から出土しているが、市内では出土例はあまり多くない。



33~37 若宮　38~39,44~49 黒田向林　40~41,65~66 小塚 A　42~43,50~51 石敷　52~54,56~57,61~63 大鹿窪
55 大中里坂下　58,59~60,86~87 滝戸　64 箕輪 B　67~76,84 代官屋敷　77~79,83 ワラビ平　80~82,85 上石敷
縮尺 55~63,67~77（1/4）　33~54,64~66,78~87（1/8）

図 4　早期～中期の出土遺物



98~99 ,113~117,120,123,126 滝戸　88~92,100~111,118~119,129 大中里坂下　93~97 ワラビ平　112 甲石
121~122 箕輪 A　124~125,127 千居　128 柚野辻
縮尺　98~101（1/4）　88~97,102~111（1/6）　112~129（1/6）

図 5　中期の出土遺物

五領ヶ台式土器に続く型式としては勝坂式土器があげられる。棒の先端が三角形や方形、丸形の工具を用いて、工具の押し引きを繰り返して文様を描くことに特徴がある、装飾性の高い土器である。勝坂式土器に含まれる型式として、古い方から貉沢式・新道式・藤内式・井戸尻式がある。

貉沢式土器（88・89）が大中里坂下遺跡から出土しているが、出土量はごく少量である。新道式土器（102～107）は、大中里坂下遺跡から出土しているが破片資料が主である。藤内式土器（108～112）になると少し出土事例が増え、甲石遺跡から大型破片が出土している。井戸尻式土器（113～116）は、大中里坂下遺跡や滝戸遺跡で多く出土している。

これらの時期に並行する他地域の土器としては、北陸系の新保・新崎式土器（90～97）や関西系の鷹島式土器（80）、東海系の北裏C式土器（81～83）、北屋敷式土器（98～101）が少量出土している。

続く曽利式土器（117～128）・加曽利E式土器（130～132）は、粘土紐の貼り付けや沈線の施文によって施文する装飾性の高い土器である。曽利式土器は、市内では千居遺跡・滝戸遺跡・大中里坂下遺跡・柚野辻遺跡・南原遺跡などから出土している。曽利式は五段階に分けられ、Ⅰ～Ⅲ式については比較的出土事例が少なく、Ⅳ～Ⅴ式のものが非常に多く出土している。曽利式土器に並行する加曽利E式土器は、EⅢ～Ⅳのものが比較的多い。

富士宮市域では、曽利式期の後半に大規模な集落が形成されたと考えられ、多数の土器が出土している。さらに、曽利Ⅲ～Ⅴ段階の土器は、埋甕炉や埋甕として見つかるものが多く、ほぼ完形の状態で残ったものが多数みられる。また、柚野辻遺跡や千居遺跡からは曽利Ⅴ式期の台付鉢の脚部が出土しており（124・127～128）、祭祀儀礼などで使用されたことが推測される。

後期

後期になると、沈線で区画した中に縄文を施した文様を特徴とした土器がつくられるようになる。

称名寺式土器は、滝戸遺跡から出土が確認されているが、出土量も少なく、やや新手のものが多い（133～135）。

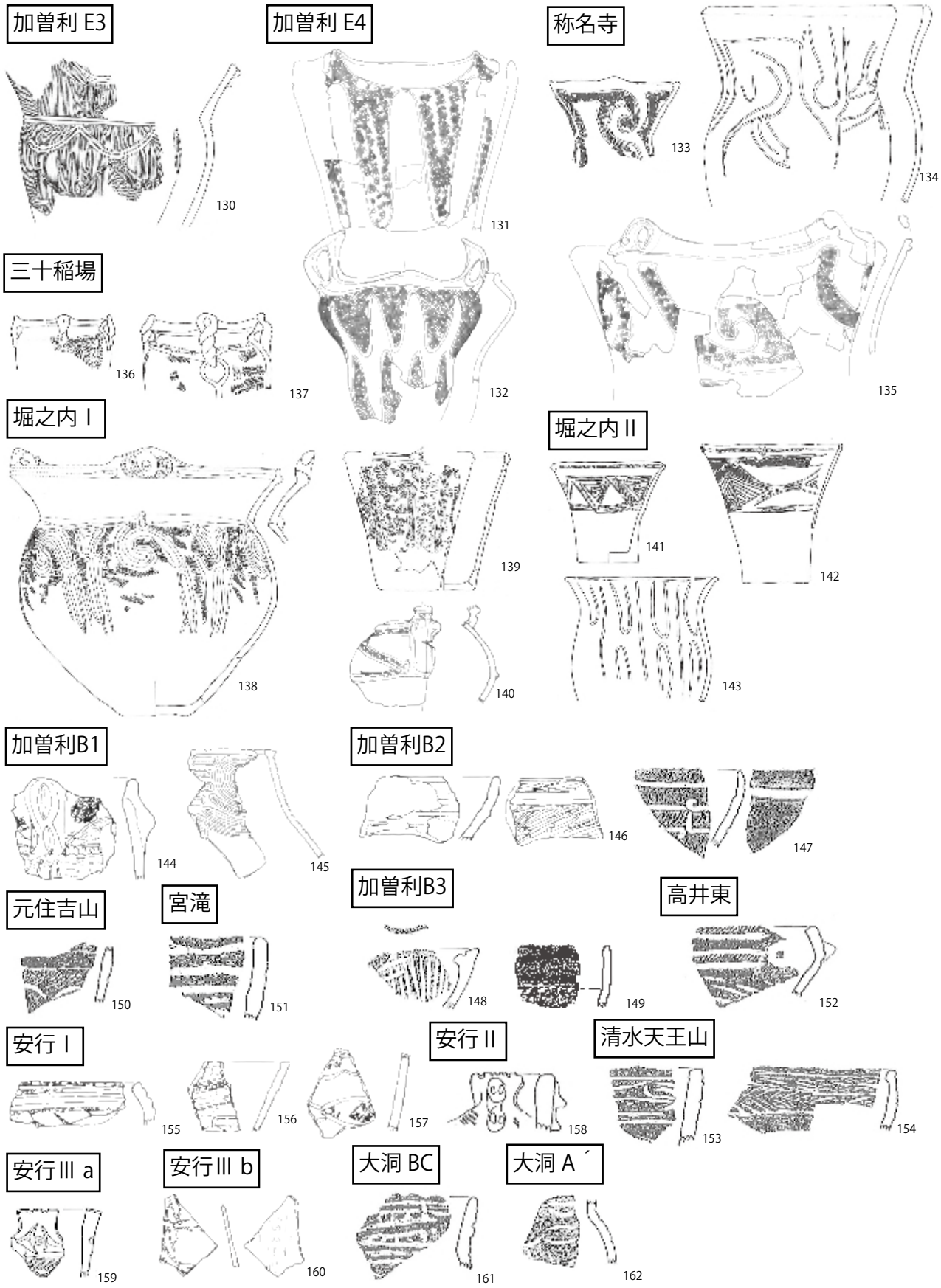
堀之内式土器が滝戸遺跡や大中里坂下遺跡、柚野辻遺跡から多く見つかっている（138～143）。興味深いことに、旧富士宮市域の滝戸遺跡や大中里坂下遺跡で出土している堀之内式土器は関東で出土するものに近いが、旧芝川町域の柚野辻遺跡で出土した堀之内式土器は在地化が進んでいるものが多く見受けられた。また、滝戸遺跡からは他地域の土器として、北陸の三十稲場式土器（136～137）や関西の福田KⅡ式土器も少量見つかっている。

加曽利B式土器は、滝戸遺跡や大中里坂下遺跡から見つかっている（144～149）。辰野遺跡や大中里坂下遺跡からは後期安行式土器（155～158）や清水天王山式土器（153～154）の古い段階の土器片が見つかっている。これらに伴って凹線文系土器である宮滝式土器（151）も少量出土している。後期末になると、急激に土器の出土事例が減少する。

晩期

晩期になると市内の遺跡数はわずかとなり、出土事例も非常に少なく、辰野遺跡・大中里坂下遺跡・柚野和平遺跡があげられる。

辰野遺跡からは亀ヶ岡系の大洞BC式（161）の土器片が見つかるのみである。大中里坂下遺跡からは、晩期の安行式土器（159～160）が見つかっている。柚野和平遺跡からは大洞A′式の土器片（162）が分布調査の際に見つかったとされているが、実物は確認できず、詳細は不明である。



130~143,145,156 滝戸　144.146~149,155,157,159~160 大中里坂下　150~154,158,161 辰野　162 柚野和平
縮尺　144,146~162（1/4）　145(1/6)　130~143（1/8）

図 6　中期～晩期の出土遺物

遺物の実年代

市内から出土した縄文土器が、何年前のものかを調べるために、放射性炭素年代測定を実施しているものが複数ある。放射性炭素年代測定については第一編第二章第七節コラムで詳述している。

ここでは、放射性炭素年代測定を実施して分析した縄文土器の分析結果の紹介を行う（表1）。^{14}C年代が測定値であり、IntCal20を用いて較正した（実際の年代に近づけるために、年輪年代による暦年代に対応させた）結果が較正年代である。BPは一九五〇年を起点として何年前かを示している。

遺跡名	型式	資料名	^{14}C 年代	較正年代（2SD）（IntCal20.OxCal4.4）	出　典
滝戸遺跡	隆線文	SZFMT-C3	12426 ± 34 BP	14875 cal BP(95.4%)14291 cal BP	富士宮市教育委員会 2025『滝戸遺跡Ⅲ』富士宮市文化財調査報告書第 60 集
大鹿窪遺跡	隆線文	Beta167672	11390 ± 50 BP	13397(0.6%)13389calBP 13356(94.9%)13164calBP	芝川町教育委員会 2003『大窪鹿遺跡・窪 B 遺跡（遺構編）』
大鹿窪遺跡	隆線文	SSK-15b	10951 ± 36 BP	12969cal BP(95.4%)12756cal BP	小林謙一、米田穣 2018「富士宮市大鹿窪遺跡出土試料の炭素 14 年代測定」『史跡大鹿窪遺跡発掘調査総括報告書』富士宮市埋蔵文化財調査報告第 53 集　富士宮市教育委員会
大鹿窪遺跡	薄手爪形文	SSK-22	10506 ± 40 BP	12674 cal BP(4.5%)12635 cal BP 12630 cal BP(85.83%)12464 cal BP 12347 cal BP(1.9%)12329 cal BP 12294 cal BP(1.8%)12275 cal BP 12219 cal BP(1.4%)12203 cal BP	小林謙一、米田穣 2018「富士宮市大鹿窪遺跡出土試料の炭素 14 年代測定」『史跡大鹿窪遺跡発掘調査総括報告書』富士宮市埋蔵文化財調査報告第 53 集　富士宮市教育委員会
大鹿窪遺跡	押圧縄文 （共伴炭化物）	SSK-C6	10712 ± 35 BP	12746 cal BP(95.4%)12680 cal BP	小林謙一、米田穣 2018「富士宮市大鹿窪遺跡出土試料の炭素 14 年代測定」『史跡大鹿窪遺跡発掘調査総括報告書』富士宮市埋蔵文化財調査報告第 53 集　富士宮市教育委員会
大鹿窪遺跡	押圧縄文 （共伴炭化物）	Beta170267	10910 ± 60 BP	12990cal BP(95.4%)12737cal BP	小林謙一 2006「静岡県大窪鹿遺跡出土炭化物の^{14}C年代測定」『大窪鹿遺跡・窪 B 遺跡』芝川町教育委員会
若宮遺跡	縄文（撚糸文）	SZFJW-3	9118 ± 72 BP	10499 cal BP(7.3%)10451 cal BP 10445 cal BP(88.1%)10179 cal BP	小林 謙一・深澤麻衣・米田穣・尾嵜大真・大森貴之 2025「富士宮市若宮遺跡および黒田向林遺跡出土土器付着物の炭素 14 年代測定」『文化財年報』富士宮市教育委員会
若宮遺跡	縄文（撚糸文）	SZFJW-5	9592 ± 30 BP	11144 cal BP(95.4%)10761 cal BP	小林 謙一・深澤麻衣・米田穣・尾嵜大真・大森貴之 2025「富士宮市若宮遺跡および黒田向林遺跡出土土器付着物の炭素 14 年代測定」『文化財年報』富士宮市教育委員会
若宮遺跡	縄文（撚糸文）	SZFJW-7	9043 ± 49 BP	10333 cal BP(0.3%)10326 cal BP 10293 cal BP(91.4%)10129 cal BP 10061 cal BP(1.2%)10042 cal BP 10021 cal BP(0.3%)10014 cal BP 9988 cal BP(2.3%)9963 cal BP	小林 謙一・深澤麻衣・米田穣・尾嵜大真・大森貴之 2025「富士宮市若宮遺跡および黒田向林遺跡出土土器付着物の炭素 14 年代測定」『文化財年報』富士宮市教育委員会
若宮遺跡	縄文（撚糸文）	SZFJW-8	9840 ± 31 BP	11314 cal BP(3.2%)11291 cal BP 11278 cal BP(92.3%)11197 cal BP	小林 謙一・深澤麻衣・米田穣・尾嵜大真・大森貴之 2025「富士宮市若宮遺跡および黒田向林遺跡出土土器付着物の炭素 14 年代測定」『文化財年報』富士宮市教育委員会
若宮遺跡	縄文（撚糸文）	SZFJW-9	9531 ± 31 BP	11074 cal BP(45.6%)10941 cal BP 10879 cal BP(49.8%)10696 cal BP	小林 謙一・深澤麻衣・米田穣・尾嵜大真・大森貴之 2025「富士宮市若宮遺跡および黒田向林遺跡出土土器付着物の炭素 14 年代測定」『文化財年報』富士宮市教育委員会
黒田向林遺跡	条痕文	SZFJK-4	8298 ± 30 BP	9427 cal BP(84.8%)9201 cal BP 9178 cal BP(10.6%)9141 cal BP	小林 謙一・深澤麻衣・米田穣・尾嵜大真・大森貴之 2025「富士宮市若宮遺跡および黒田向林遺跡出土土器付着物の炭素 14 年代測定」『文化財年報』富士宮市教育委員会
黒田向林遺跡	撚糸文 （高山寺並行）	SZFJK-7	8182 ± 34 BP	9272 cal BP(32.2%)9168 cal BP 9150 cal BP(63.2%)9017 cal BP	小林 謙一・深澤麻衣・米田穣・尾嵜大真・大森貴之 2025「富士宮市若宮遺跡および黒田向林遺跡出土土器付着物の炭素 14 年代測定」『文化財年報』富士宮市教育委員会
大中里坂下遺跡	北屋敷	SZFJM-1a	4453 ± 23BP	5281cal BP（45.8%）5165cal BP 5137cal BP（9.8%）5100cal BP 5082cal BP（39.8%）4969cal BP	小林謙一 2016「大中里坂下遺跡出土土器着試料の^{14}C年代測定と較正年代」『富士宮市の遺跡Ⅴ』富士宮市埋蔵文化財調査報告第 51 集 富士宮市教育委員会
滝戸遺跡	曽利Ⅳ a	SZFMT-5	4179 ± 21 BP	4833 cal BP(20.8%)4792 cal BP 4763 cal BP(74.6%)4620 cal BP	富士宮市教育委員会 2025『滝戸遺跡Ⅲ』富士宮市文化財調査報告書第 60 集
滝戸遺跡	曽利Ⅴ	SZFMT-4	4094 ± 21 BP	4800 cal BP(18.8%)4758 cal BP 4696 cal BP(4.7%)4676 cal BP 4647 cal BP(70.9%)4521 cal BP 4461 cal BP(1.1%)4453 cal BP	富士宮市教育委員会 2025『滝戸遺跡Ⅲ』富士宮市文化財調査報告書第 60 集
滝戸遺跡	堀之内Ⅰ	SZFMT-2	3929 ± 24 BP	4505 cal BP(1.3%)4493 cal BP 4437 cal BP(0.6%)4432 cal BP 4425 cal BP(90.0%)4287 cal BP 4273 cal BP(3.5%)4250 cal BP	富士宮市教育委員会 2025『滝戸遺跡Ⅲ』富士宮市文化財調査報告書第 60 集

表１　年代測定結果

富士宮市の弥生土器編年

富士宮市の弥生時代の土器編年は、図7・8で表した変遷を辿るものと考える。弥生時代は前期・中期・後期の三時期に分けられる。前期は樫王式土器（渋沢遺跡第Ⅰ期）・水神平式土器（渋沢遺跡第Ⅱ期）の二時期、中期は渋沢式土器（渋沢遺跡第Ⅲ期）・嶺田式土器・有東式土器の三時期、後期は雌鹿塚式土器として三時期五段階に細分する（佐藤ほか　二〇〇二、永井　二〇一五）。富士宮市での遺跡動向は、弥生時代前期から渋沢式土器の段階までの遺跡がはっきりとしているのに対して、弥生時代中期中葉とする嶺田式土器から有東式土器までの出土例は確認されておらず、極めて偏った遺跡の変遷を辿る。

渋沢遺跡の土器と渋沢式土器（図7）

渋沢遺跡の年代は、弥生時代前期から中期前葉までの三時期に分けて捉えられる。三時期目に相当する中期は、静岡県東部地域において土器編年の基準となる土器群である渋沢式土器となり二期に細分される。渋沢遺跡は富士宮市における弥生時代の到来を告げるもので、中部高地や東海地域など系譜の異なる地域からの影響のうかがえる多様性を持った遺物群となっている。渋沢遺跡内の限定的な地点からの採集品が多いが、それらは遺跡自体の時代的な変遷を十分に反映させるものである。

第Ⅰ期は樫王式土器段階で、少量ながら鉢の口縁破片の出土が確認されている。第Ⅱ期は水神平式土器の段階で、条痕文土器のうち口縁端部外面に凸帯を貼付する壺類や、口縁部に小突起が施される甕などが見られる。

第Ⅲ期は渋沢遺跡の主体となる時代で、丸子式土器に並行するものである。主要な器種としては、球胴で波状文や連弧文などが施される長頸壺や、胴部最大径が肩部にある長胴の壺で羽状文や横線文などを条痕で施文する壺などと、頸部が緩やかに外反する長胴の甕や、口縁が大きくラッパ状に開き口縁端部に押引文を施す甕などで構成される。これらは、共通する型式が多く、その親和性のうかがえる丸子式土器とは系譜の異なる土器型式でもあり、中部高地などの異なる集団の関わりを想定させる。しかし、土器製作の素材となる粘土は、胎土分析により器種に関係なく羽鮒地区周辺の富士川沿岸での採集が指摘されており、土器の系統的な違いを示していない。異なる集団の相互の融合により、独自の土器型式を成立させていたことになる。

渋沢遺跡の終焉後、弥生時代中期中葉の嶺田式土器の段階で西通北遺跡（沼津市）や有東遺跡（静岡市駿河区）が登場する。東海東部において、この時代から水田稲作に対する比重を重くする農耕社会が形成され、環濠集落が登場し、墓としての方形周溝墓が採用されるようになる。反して、山間地に広がる富士宮で遺跡は確認されなくなる。

雌鹿塚式土器（図8）

弥生時代後期の土器として、沼津市の雌鹿塚遺跡出土土器を標識とした雌鹿塚土器は、雌鹿塚Ⅰ・Ⅱ式期を後期前葉、Ⅲ式期を後期中葉、Ⅳ・Ⅴ式期を後期後葉にそれぞれ対応させられる（沼津市教育委員会　一九九〇）。

雌鹿塚Ⅰ式期

弥生時代中期後葉である有東式土器段階から後期へ移行する土器の型式は、大きな変化を示す。富士宮市域においては、この段階の

遺跡は確認されていない。田方地域にある、神崎遺跡（伊豆の国市）の集落や雌鹿塚遺跡第31号住居址の出土資料が相当する。壺は折り返し口縁壺・複合口縁壺・単純口縁壺、甕は台付甕でそれぞれ構成され、後期の主要器種がそろう。

雌鹿塚Ⅱ式期

壺は、三つの型式が見られるものの、型式変化は同調しており、長頸から短頸へと移行する。肩部の張らない胴部に緩やかに外反する口縁部が付される。文様は、結節文や貼付文により縄文を視覚的に区画するものが登場し、縄文を帯状に施文することが始まる。折り返し口縁壺では、口縁端部と口縁内面、複合口縁壺では複合部に縄文、貼付文をそれぞれ施す。

台付甕は、ハケメ調整で口径と胴径は同程度か口径を大きくするものを基本とする。口縁部の屈曲も不明瞭で、緩やかに弧を描きながら外傾させる。外面を調整のハケメは、口縁部と胴部で方向を違えて調整に基づくものは、少ない。

鉢は、折り返し口縁と単純口縁のものがある。

雌鹿塚Ⅲ式期

環濠集落の終焉に伴う環濠からの出土資料が多い。壺は、短頸化と胴部の球胴化が進行する。球胴化とともに口縁部が大きくラッパ状に開くことにより、口縁部と胴部を画する弱い屈折の見られるものが登場する。また、胴径との比率において、径が大きくなる底部を形成するものが現れる。

台付甕は、前段階と様相に大きな変化はないが、長胴気味となり、最大径を上位で測るものが多くなる。外面のハケメは、口縁と胴部で描き分けられるようになる。胴部から口縁の順序を基本とする。また、口縁外面にヨコハケメを施すものが残る。

鉢は、壺胴部下半と同じ形状ではなく、胴部上半に最大径を持たせ、口縁部を折り返しとしたものが登場する。また、口縁部に把手を付けたものが確認される。

雌鹿塚Ⅳ式期

壺は、口縁部が外傾しながら開くものから頸部で弧を描きながら広がるものへ変化し、胴部と口縁部を区分する屈折部が明らかではなくなる。外面も文様は、肩部に帯状の施文として限定され、結節文、貼付文以外に刺突による横線文による区画が明らかになる。胴部は、球胴化の進行に伴い下半部の稜線が不明瞭なものが登場する。

台付甕は、口径と胴径が大きく違わないものが大半となる。外面のハケメ調整は、口縁から胴部への順となり、口縁の外への湾曲が明瞭となる。

鉢は、小型のものが多い。

雌鹿塚Ⅴ式期

壺は、口縁部の外傾角度が強まり、口縁の短頸化が進む。胴部の球胴化より肩部の張りが強くなり、下半の稜のないものが増える。

台付甕は、口径に対して胴径が上回るようになり、胴部の張りが目立つものへと移行する。同時に外傾する口縁の湾曲が強まり、器高に対する口縁の高さも減じるようになる。台付甕においては、長胴と球胴の二極化が進む。この段階より外面調整のハケメの規則性が薄れ、縦位のハケメで調整するものが登場する。

外来系土器の動向

雌鹿塚式土器の成立には、遠江の土器型式が関わったことが指摘される。弥生時代中期では立地していなかった場所への集落の進出や、方形指向の竪穴建物を取り入れている点からも生活様式の伝播として捉えられるものである。雌鹿塚Ⅰ式期～Ⅱ式期では、西遠江由来の外来系土器として高坏が見られる。雌鹿塚式土器本来の組成では、土器としての高坏を含まないが、外来の型式的な要素として確認される。また、この段階で、頸部屈折が明瞭な甕、胴径が大きく口径を上回る甕などは、同じく外来の属性として捉えられるものである。

雌鹿塚Ⅱ式期～Ⅲ式期では菊川式土器の搬入が顕著となり、在地の土器型式に菊川式土器固有の製作技法が取り入れられ、新たな型式の創出が促されるようになる。また、この段階に中部高地に展開する箱清水式土器など、広域的な広がりを示す土器の搬入が見られる。弥生時代後期の土器交流は、雌鹿塚Ⅲ式期に近隣地域を対象として活発な動きが認められるものであるが、雌鹿Ⅳ式期になると、それは寸断されている。

雌鹿塚Ⅲ式期以降、地域特有の型式変化が進行することになる。それは、器形や文様など型式を規定する諸要素の中に菊川式土器を中心とした外来の製作技法を取り入れたことにより成立する。壺の頸部ヨコナデやミガキの調整、口縁内面の結節文と縄文による文様構成、壺胴部下位の屈折、文様としての刺突による疑縄文や横線文の採用などとして認められるものである。

雌鹿塚Ⅳ式期からⅤ式期では、外来系土器の波及は低調となり、外来の型式的な要素を採用しつつも独自の型式変化を示している。

時代設定

弥生時代後期の年代は、雌鹿塚Ⅰ式期の始まりから雌鹿塚Ⅴ式期までが相当する。雌鹿塚Ⅰ式期の始まりは、標高五〇〇mほどの富士市岩倉A遺跡で採集された壺などからもうかがえるように、富士山の山間地への集落遺跡の進出が明らかなことから、富士山の噴火で2200calBP（300calBC〈紀元前二二〇〇年〉）とされる湯船第2スコリア噴出年代（宮地　二〇〇七）以後の静穏期のことと考えられる。宝永噴火などの噴火による災害からも分かるように、富士山麓での生活には多くの障害が働くものとなる。富士宮市内での弥生時代後期における遺跡の造営が具体化するのは一世紀前半以降のことではないかと考える。そして、弥生時代中期の消長が限定的で、後期へスムーズに継続しない要因の一つも富士山の噴火が影響したのではないかと考える。

雌鹿塚Ⅲ式期で沖積平野の遺跡の多くが終焉を迎える。炭素同位体年輪年代法の成果によれば、二世紀前半代は大きな気候の変動があり、大洪水が引き起こされたとされる時代であり、平野部の遺跡の一般的な生活が覚束ない事態となっていった（中塚　二〇二二）。

雌鹿塚式土器の終わりは、古墳時代前期とされる大廓式土器の成立によるものである。大廓式土器については、大廓Ⅲ式期を奈良県箸墓古墳のはじまりとする定型的な古墳の登場時期としている。箸墓古墳の被葬者が卑弥呼である可能性が高まる中、卑弥呼が邪馬台国の女王として共立された時代である、二世紀の後葉を大廓式土器の始まりとする。

以上のように雌鹿塚式土器は、大規模な富士山噴火からの環境が再生される時期を踏まえ、その始まりを一世紀前葉として、以降二世紀後葉までの約一五〇年の時間幅を考える。

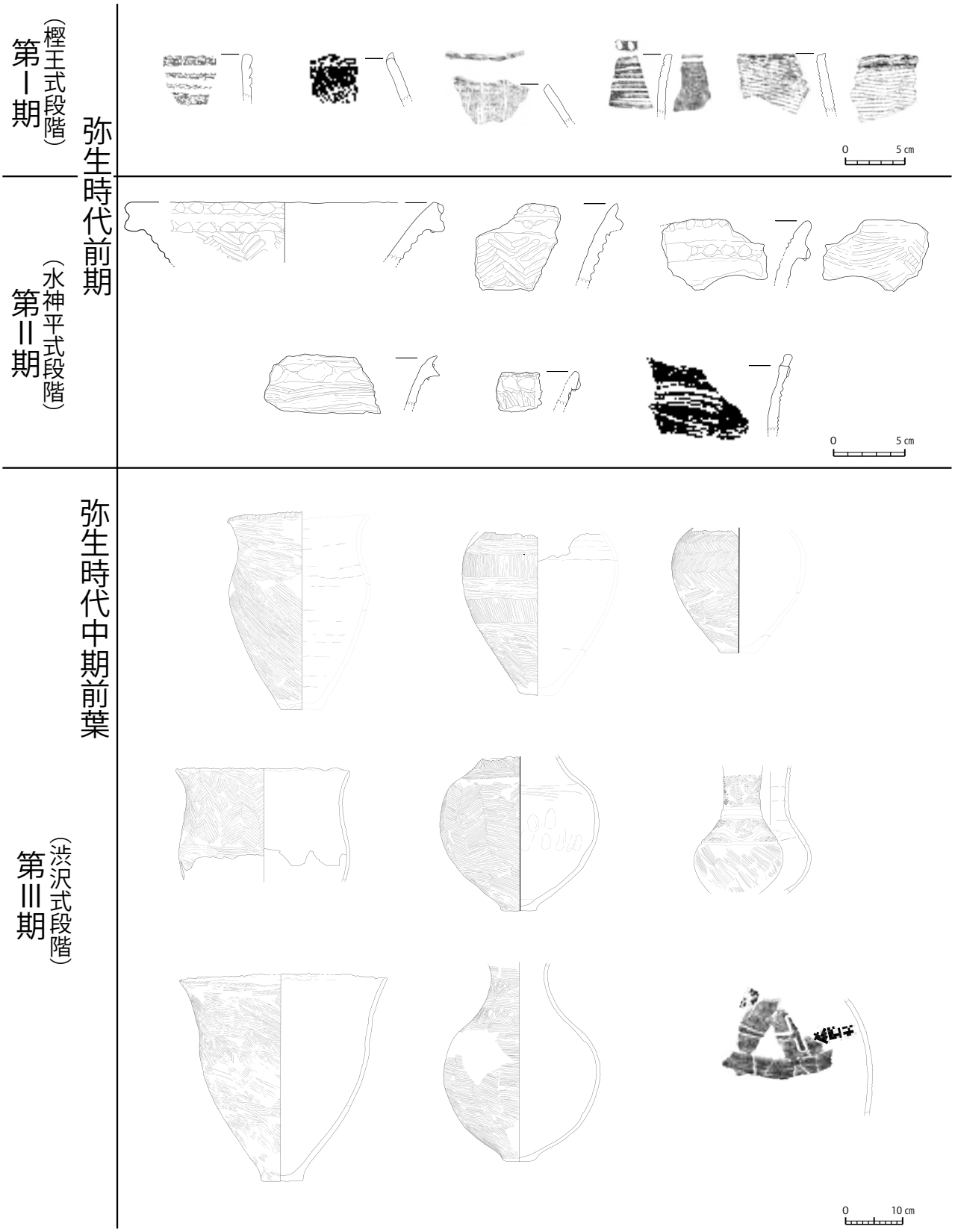


図７　渋沢遺跡出土土器編年

雌鹿塚式Ⅰ期
弥生時代後期前葉
雌鹿塚式Ⅱ期
雌鹿塚遺跡 31 号住居址
0 10 cm
滝戸遺跡（溝）
丸ヶ谷戸遺跡 SB01
丸ヶ谷戸遺跡 SB02
丸ヶ谷戸遺跡 SB05
城山遺跡 SZ1
0 10 cm

図 8　雌鹿塚式土器編年

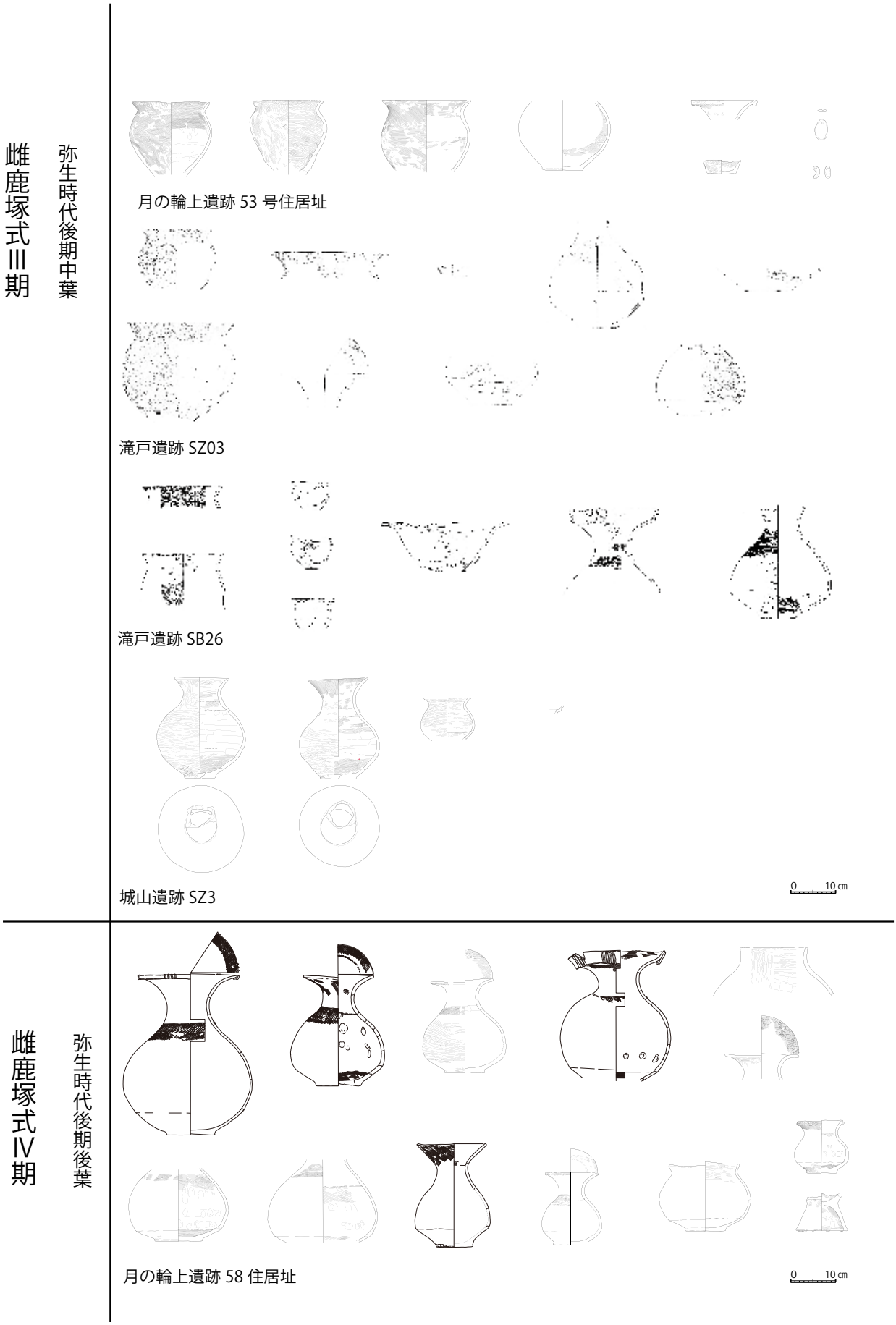

雌鹿塚式Ⅲ期
弥生時代後期中葉
月の輪上遺跡 53 号住居址
滝戸遺跡 SZ03
滝戸遺跡 SB26
城山遺跡 SZ3
0 10cm
雌鹿塚式Ⅳ期
弥生時代後期後葉
月の輪上遺跡 58 住居址
0 10cm

図 8　雌鹿塚式土器編年

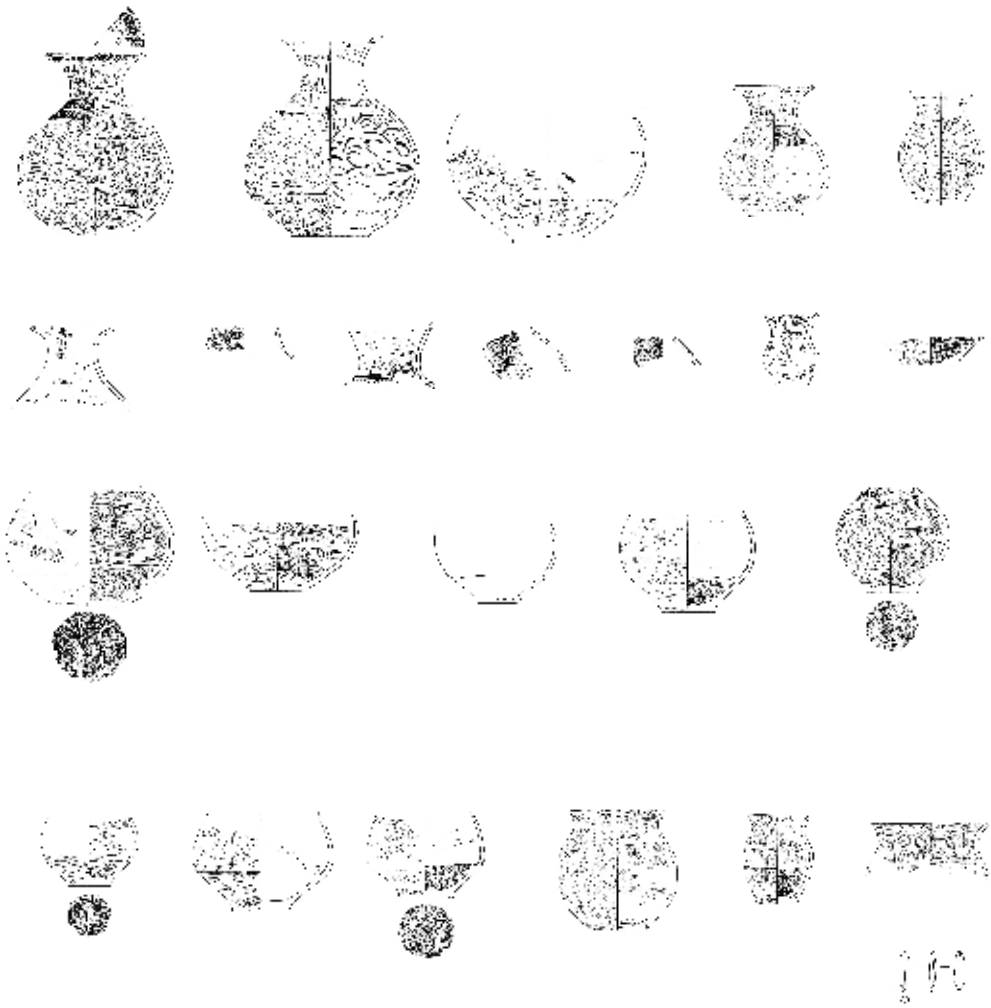
雌鹿塚式Ⅳ期

弥生時代後期後葉

雌鹿塚式Ⅴ期

滝戸遺跡 SZ11

0　10 cm



植出遺跡 SB436

滝戸遺跡 SZ12

0　10 cm

図 8　雌鹿塚式土器編年